

良い授業とは誰にとっての良い“授業”なのか

1. 教育を考える一言

「自分にとって良い授業が生徒にとっても良い授業とは限らない。」

2. 背景

これは、学部4年次の教育実習の際にお世話になった指導教官の先生から言われた言葉です。例え「自分では『よくできた』と思う授業であっても、それが必ずしも生徒たちのためになる授業であるとは限らない。それは教師の自己満足でしかない。」実習が始まって1週間が経った頃、教材研究や授業の進め方にも少しずつ慣れ、これまでで最高の出来映えだった、と納得の行く授業ができた回がありました。そのような自分の満足した様子に気づいてか、授業後に指導教官の先生がかけてくださったのがこの言葉です。

3. 考察

1人の教師が100回授業を行って、1回たりとも同じ授業は存在しません。例え同じ内容を扱ったとしても、その授業の時間やタイミング、対象となる生徒が異なるだけで、全く別の授業となります。「授業は生き物だ」ということは何度も言われてきましたが、実感したのはこの時が初めてでした。もともと考えていたレッスンプランの通りに授業が進んだとしても、それがその時、その瞬間の生徒にとって最善とは限りません。生徒はわからないことや疑問に思ったことがあっても、授業の流れを気にして口にしないだけかもしれません。生徒の反応や表情に注目し、臨機応変に問いかけたり、扱う内容を変えたりすることで、予定通りに授業が進まないことがあったとしても、生徒にとって学び多い授業であったのなら、むしろそれこそがきっと“良い”授業なのだと思えるようになりました。指導教官に指摘されるまで、私は自分の教えたことだけを一方的に生徒に押し付け、共に授業を作りあげるはずの生徒の存在が目に見えていなかったように思います。授業は誰のためでもなく、目の前にいる生徒のために行うものということを忘れてはいけません。その時にできる最大限の授業を行えるよう、教師は「学びの専門家」として、常に研鑽に務めなければならないのです。教師や教師を目指す人にとっては当然のことかもしれませんが、私にとっては欠けていた視点だったように感じます。独りよがりな授業を行うのではなく、共に授業を作り上げる生徒の存在を忘れないこと、そして常に学び、成長し続けなければならない教師という職の魅力を教えてくれた指導教官に感謝し、この言葉を胸に刻みながら教師として生徒と共に学び、成長していきたいと考えます。

参考文献

佐藤学『教師花伝書』小学館、2009年